

### 第三回大会に参加して

岩本由輝

一〇月一日午後四時〇三分、三日間の東京での所用を終えて、上野発常陸太子行の急行ときわ一五号に乗る。発車間際にやつて来たにもかかわらず、ガラガラの最後尾の車両に沼田健哉会員と隣り合つた四つの座席をそれぞれに占拠して話に花を咲かす。とにかく回送列車のごとくであつたが、水戸に着いて急行の看板をおろした途端に通勤列車に早変わり、たちまち満員となる。しかし、それも束の間、水郡線の駅を一つまた一つと進むにつれ、再び乗客はまばらになつて行つた。水戸を出る頃すっかり暗くなつていたが、それでも外の景色が山村の様相を呈して來たことがわかる。おしんの故郷尾花沢の在の出身である菅野俊作会員は、水郡線を郡山より入ってきて、「茨城県には俺の故郷よりすごい山の中がある」とのたまわっていた。午後七時二四分、終点の常陸太子に着き、迎えのマイクロ・バスでホテル奥久慈にむかう。

途中、久慈川にかかる橋を渡り、左折して二、三分、川沿いに上流にむけて走つたが、夜月にもなかなか大きい川のようである。鮎の名所として知られている川であるが、いまでも天然繁殖によるものなのであろうか。このところ、私は琵琶湖岸の漁業村落堅田の調査を手がけはじめているが、この古代・中世以来の供御人の伝統を持つ漁村で現在、最大の水揚を誇るのは全国各地河川に放流する鮎の稚魚である。あるいは、この春、堅田のイケスのなかにいた鮎の残党に再会できるかと思つて、宿の人へ聞いてみたら、このあたり

の鮎は断じて生まれも育ちも奥久慈の清流のなかとの御託宣であつた。

ところで、この地域、日本でも有数のコンニャクの産地であり、一八世紀なかから伝統を持つてゐる。そのことは、茨城大学の木戸田四郎教授の「明治維新の農業構造」(御茶の水書房)に詳しいが、歴史学界においてつとに名高い木戸田教授の豪農論はこの地域におけるコンニャク栽培農家の綿密なフィールド・ワークから生まれたものである。題して、「近代日本のコンニャク的起源」とでもいふべきが。

さて一〇月一二日午前九時、第三回村研大会が始まつた。昨年三〇周年を記念して一世代を画したわけであるから、今年は新世代の始まりである。自由報告が八つずらりと並び壯觀である。ただし、大会参加記の執筆を依頼されたときから、周辺の情景描写も入れなければ主催者の勞に報いることはできないと勝手な理屈をつけて会場外に抜け出したりしたのですべてを拝聴するわけには行かなかつた。他の真面目な二氏の参加記にもつぱら期するゆえんである。

長谷部弘会員によつて明らかにされた陸奥信達地方における幕藩体制の帳尻合わせともいふべき入り組み支配の実態は、大名領国制のアーロニーとでもいふべきものであるが、そこに石高制という形をとる封建支配の本質が端的に現われてゐるわけで、こうした支配のもとで、あるいは支配とかかわりなく、農民たちがどのような生活・生活を営んでいたかの実証的検討が今後において望まれる。鷹田和喜三会員の北海道の移民村落にみられる母村の文化的影響に関する報告は、近世後期における北関東や南東北農村への北陸淨土真宗農民の移民に興味を持つてゐる私にとって大いに得るところ

があつた。近世移民、明治以降の北海道移民、さらにアメリカ移民などに、浄土真宗が深くかかわっていることの意味はいつか解明さるべきことであろう。

小内透会員の社会主義志向の集団農業である北斗農場の展開過程や高橋満会員の「米の生産調整」に対する「ムラ」の対応も現代農業を考えるうえで参考になつたが、前者における経営會議や総会のあり方、後者における青年会による罰則とともに休日規制など、どうも「ムラ」の息苦しさを感じられたし、そのような「ムラ」が農政の基盤として利用されることに不安を覚えたのは果して私だけであろうか。

社会変動論の立場から複合經營農家における婦人労働をとりあげた松田苑子会員は、農業機械の導入などによる近時の農業技術の変化が農家婦人労働の解放と同時に疎外をもたらしたことを探していいる。

浅野慎一会員の報告は、従来の出稼ぎ研究において触れられるごとのなかつた出稼ぎ者自身の再生産を基底とした主体的な村落再編の嘗みを実証しようとした意欲的なものであり、西尾紳子会員と北原淳・木材和雄会員はいずれも兼業の深化している農村をとりあげているところに特徴があつた。

このあと、第二次世界大戦前の経済更生運動のなかで大字町において作られた映画「栄ゆく村」が上映されたが、いまはすでにみる

ことのできぬ農村風景とともに、経済更生運動の帰趨に思いを馳せるととき、村落研究者の一人として複雑な思いにかられることを余儀なくされた。

夜はいつもながら期待の懇親会、心づくしの馳走に箸を走らせな

がら話が弾む。毎年顔を合わせる懐しい顔とともに、村研三一年目ともなると、これから馴染みになつて頂けるであろう新しい方々も多い。そうした方々から額の広さのゆえか、盛んに盃を献じられる。私は酒席を苦手とはしないが、いかんせん酒が呑めない。そのことを言うと、何升も呑むような顔をしてといわれるが、これも生來、気が弱く、ありのままを顔に出せないゆえのこと、今後ともそのことを御承知のうえで末永くおつき合いを願うこととした。こうしてこの夜も人にもっぱら酒を勧めながら、床に就いたのは、すでに丑三つ時であった。このため早朝起きて袋田の滝を見て来ようという最初のもくろみはついえ去つた。それはまたの機会にすることとしよう。

第二日日の二〇月一三日午前九時から共通課題「農政と村落」が始まること。

高橋明善・柄沢行雄両会員による「自治体・農協政策と村落」において、山形県東田川郡藤島町の藤岡・新屋敷、新潟県北蒲原郡豊浦町の三つ樹・下本田などがとりあげられたが、自治体と農協とが農政においてうまくかみ合つてゐる事例が必ずしも多くないことをど、私自身もいくつかの「ムラ」についてそりした実情を知つていただけるだけに教えられるところが多かった。

不破和彦会員の「『地域農政』と村落」は、福島県伊達郡磐山町における地域農政特別対策事業と農用地利用増進事業をとりあげたものであるが、この町は私の育つた福島県相馬市いわば裏山続きで土地感もあり、私自身、まつたく偶然に不破会員と同じ時期に調査に入つたことがあるため、その後の推移について、とくに深い関心をもつてうかがうことができた。

特別報告をお願いした磯辺俊彦氏の「地域農政の展開と『むら』」は、單なる「地域農業論」や「むら再生論」の限界を指摘し、その線上からの「公的介入」や「ファン・ヨ化」に対する歯止めを念頭におかれ、藩政期以来の小農的土地所有の変質過程をふまえながら、上からの農民誘導と下からの自立的展開が拮抗する現状を冷静にとらえていたところなど、「それでも『ムラ』は生きている」式の主張につも鮮明させられている私には大変頼もしく思われた。

討論に移ったが、時間切れで十分に論議をつくすまでにはいたらなかつた。私など、靈山町の農用地利用増進事業をみた経験から農地法に対する農振法は、かつての班田収授法に対する三世一身法のこときものであり、いつ塾田永世私財法に匹敵するものが登場するのであろうかといささか勝手なアノロジーを考えていたが、磯辺氏がいまここまできたところにおいて農地法の再評価が必要であると発言されたのを聞き、ひとまず安堵の胸をなでおろした。その意味で、村研において一回、農地改革を現時点においてどう見るかという議論を開いてみる必要があるのではないか。

こうして二日間の大会を終えて感じたことは、報告者は別として自由報告・課題報告のいずれにせよ、質問したり討論に参加しているのは常連ばかり、会場に多く姿をみせていた若い会員の積極的な発言がほとんどみられなかつたことは、新しい世代に入つた村研としていささか淋しい感じがする。今年の共通課題は、第三回大会に引き継がれることになつたが、同世代間の議論が盛んになることを大いに期待したい。すでに若くもなく、といつても年寄り扱いされるのもまだ嫌な、中途半端な年齢にある私の切なる願いである。

午後三時半、第三回大会は終り、会場設営にいろいろ心を配つ

て下さつた東敏雄会員らの見送りを受け、マイクロ・バス二台で常陸大子駅まで送つて貰う。駅では午後四時〇三分発で郡山にむかうものと、午後四時〇七分発で水戸にむかうものとが、それぞれ播州赤穂での再会を約して別れて行つた。

最後になつたが、大会の運営にあたられた茨城県在住の梅沢行雄・桐原邦夫・斎藤典生・桜庭宏・東敏雄・松村直道・村中知子・守屋孝彦の諸会員に本当にお世話になりました。御苦労様でしたと心からなる感謝を申し上げたい。